

## I C Tを共通言語とした現職教育の推進について ー現職教育主任としての実践を通してー

多度津町立多度津中学校  
指導教諭 小滝 武志

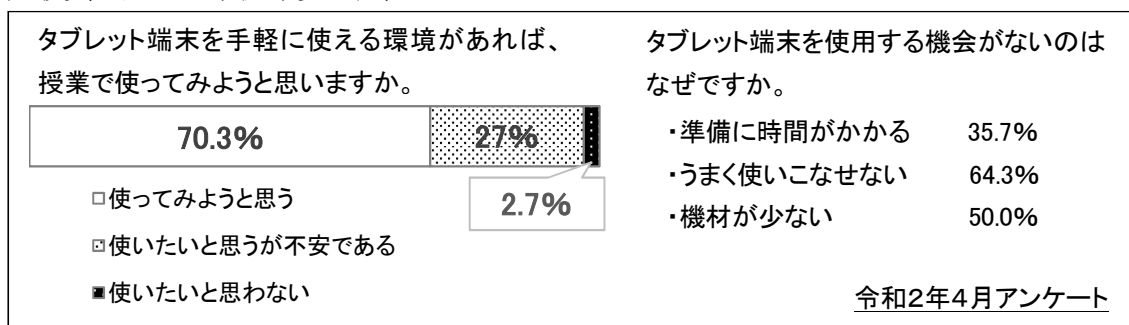
### 1 はじめに

本校では、教育の不易を大切にされた地道ではあるが優れた教育実践が、現職教育の中で研修として位置付けられてきた。また、その成果は、県教育委員会による「香川の教育づくり発表会」や学校独自の実践発表の場により、県内外に幅広く発信してきたところである。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響により、国による「G I G Aスクール構想」が前倒しされ、我々の現場に急きょI C T化の流れが押し寄せ、「従前の教育観を大きく変えなくてはならないのではないか？」という意見も多く聞かされるようになった。加えて、教育現場には、I C T、とりわけ生徒に貸与される1人1台端末(以降：タブレット端末)を有効に利用する技術や環境は、十分に整えられていなかったといっても過言ではないだろう。

しかし本校の現職教育部では、これを元来ある教育財産をさらに充実させる好機会と捉え、特に増加する若年教員をターゲットに、「教育の不易」というべき我々が引き継ぐ財産を身に付けさせつつ、新たな教育財産も重ねて利用させることで、さらに教員の指導力を向上させる手立てを構築し、実践したいと考え、本テーマを設定した。

### 2 実践の内容・方法

#### (1) 教員の実態と学校環境の把握



タブレット端末を利用した授業づくりをしてみたいと思っている教員が多いものの、その環境が整っていないこと、機器が不足していること、うまく使いこなせないことが本質的な課題となり、授業づくりにI C Tを組み込む際の障壁になっていることが分かった。また、校内の無線LANの通信環境を調査すると1学級(約30人)の生徒が同時に使用できる環境ではなく、生徒自身が使用する際にもストレスを感じている様子が見られた。この現状を「いつでもどこでも誰でもI C Tを使える環境」に変えるべく町教育委員会へ支援を依頼するとともに、教員への研修を実施し、環境整備と教員のスキルアップ研修を計画的に行った。また、I C Tの魅力を実感できるように定期的に授業公開を実施した。令和2年度は、教員スキルアップとストレスなくI C Tを使用できる環境の整備期間とし、令和3年度のタブレット端末の本格導入に備えた。

## (2) 現職教育とICTの融合

教員が同一歩調で実践してきたその授業づくりにICTという共通言語を組み込んだ。平成30年度より、本校では教科を超えた汎用的な授業づくりに取り組んでいる。具体的には、学校全体でICTの特性を理解するために、共通の学習指導案を用い、教科や学年の枠にとられない授業討議ができるように設定した。特に、学習指導過程においては、その過程を「つかむ」「つかう」「くらべる」「つなぐ」「かえる」の5つに分け、授業づくりの基盤とした。教員が授業づくりにICTを組み込む際に、5つの学習指導過程を改めてとらえ直す機会もねらいとしている。ICTを組み込んだ5つの学習指導過程の詳細は、以下のとおりとする。

### 5つの学習指導過程

「つかむ」では、学習課題の出会い方を工夫し、学習意欲や必要感を高める。

「つかう」段階で、今、もっている学力で自力解決を目指し、課題解決への意識を高める。

「くらべる」では、比較、分類により、相違点や共通点を見だし、それぞれの生徒や集団の思考を深める。

「つなぐ」は、学び合いの終末において、生徒自身の考えを修正、深化させる。さらに、思考を変容・発展させる。

「かえる」ことにより、学んだことを他に置き換えて成果を実感したり、自己の学びを振り返ったりして自身の変化を実感する。



## (3) 実践の蓄積

教科内で5つの学習指導過程の「つかむ」「つかう」「くらべる」「つなぐ」「かえる」の特性を生かしたICTの活用方法を見出し、教科プロジェクトとしてデータを残していく。特に、教科の特性に応じた活用方法を研究し、ICTと学習指導のより良い在り方を本校の教育財産として蓄積する。蓄積したものは公開し、教員間の連携を支援する。

## (4) 採点支援システムの活用

指導の根幹である「評価」と、ICTの完全導入を重ね、かつ、「働き方改革」の視点を加えることで、本校の実践を側面的に支えることを目的に、採点支援システム「百問繚乱」を取り入れた。このシステム導入のメリットは、ペーパーテストの手入力を省き、観点別学習到達度等の自動集計がPC内で行えること、また、出力帳票により、正確に集計された答案を生徒に返却することで、即時評価につながることである。しかし、導入の最大のねらいは、ペーパーテストにかかわらず、生徒の成果をあらゆる側面から正当に評価するスキルを教員が身に付けることであった。同システムを積極的に利用することは、教員自身の実践の迅速な評価につながるとともに、授業改善への意欲の向上に大きく寄与することとなった。



### 3 実践の成果

#### (1) 教員の実態と環境の把握

生徒の興味・関心を高めるためにICT機器を活用した授業づくりをしていますか。		
している+どちらかといえば している	令和3年5月	令和4年1月
	67.6%	87.1%

教員は、自らの授業力を向上させることにより生徒の学力向上につなげたいと考えている。町教育委員会の全面的な支援のおかげで、本校は、「いつでもどこでも誰でもICTを使える環境」が整いつつある。さらに、現職教育を中心に日常的に校内研修を位置付けたり、授業公開を計画的に実施したりすることで教員一人一人のICTスキルも飛躍的に向上した。現在は、タブレット端末を用いた授業づくりだけではなく、職員会議や学級運営にも活用している。公開授業の際に校外の参観者の方々から、「ICTを利用するレベルから活用するレベルに到達している教員がいる。」「生徒のICTスキルが高い、日常的に使用している証だ。」と称賛の声を頂いた。環境整備とスキルアップの両輪がうまく回ることで教員自身の意識が大きく好転したと感じている。

一方、生徒にも様々なアンケートを行ったが、注目すべき内容は以下の項目である。

コンピュータなどのICT機器を使って学ぶことは好きですか。		
思う +どちらかといえば思う	令和3年5月	令和4年1月
	94.7%	92.3%
コンピュータなどのICT機器を使って学ぶと、授業の内容がいつもより、よく分かりますか。		
思う +どちらかといえば思う	令和3年5月	令和4年1月
	88.4%	87.4%

生徒はICTを利用した授業を好んでいる。さらに、ICTを使って学ぶと授業内容もよく分かると感じており、いずれも高い水準を維持できている。教員自身が積極的にICTを使用した授業づくりを実施した結果であると感じている。

#### (2) 実践の蓄積

教科プロジェクトとして、各教科から数十の実践が集まっている。どの教員も最初は失敗をしながらではあったが、教科の特性に応じたICTの効果的な活用方法を一人一人が見出している。

今後も継続して実践を収集し、本校の知財として蓄積して、来年度の香川の教育づくり発表会において成果を報告する予定である。

#### (3) 採点支援システムの効果

使用した教員の多くは、作業の正確性・迅速性を実感しており、継続して使用したいと考えている。また、作業が早くなるだけではなく、問題別に解答の傾向をつかみやすい、学力分析ができるなど様々な効果を感じ取っていた。さらに、生徒も自分の解答の正誤と正答率を見比べることで学習意識が高まったり、授業の受け方を振り返ったりする面も見られ、大きな成果が得られた。

### 4 普及させたい取組と期待される効果

ICT導入に伴い、教員の負担増が叫ばれているが、「紙と鉛筆」「黒板やモニター」に、ICTが加わり、教員が「指導と評価を一体化」させる中で、一つの授業モデルを通して、協働しICTの利用を精選する本校の研修システムは、その負担感をまったく感じさせないものであった。また、その過程の中で導き出されたICTの活用方法は、学習指導過程ごと

にまとめられているので、授業づくりにおいて効果的な支援ができると考える。さらに、採点支援システムの導入は、採点作業がより正確に、かつ迅速に行われることから、採点作業の環境そのものを大きく改善でき、働き方改革の視点からも効果的であると確信している。

## 5 課題及び今後の取組の方向

### (1) 現時点の課題

しばしば起こるシステム障害である。ICTは端末と通信環境が整ってこそ、その効果を最大限に発揮できる。町教育委員会や業者等との連携を密にして最新の情報を収集することが大切である。OSやアプリの更新時に不具合が生じることがあり、生徒の学びを止めないためにもネットワーク担当者と密な連携が必要である。ただ、タブレット端末だけに頼るのではなく、タブレット端末がなくても授業づくりや学級運営ができる力量は常にもっておきたい。

### (2) 今後の取組の方向

#### ① タブレット端末の持ち帰り

ICTを用いた授業づくりを積み重ねていくと、生徒のタブレット端末に日々の学習活動の記録が残っていく。次第に生徒のタブレット端末自体が生徒自身の作り上げる参考書となり、その蓄積を生徒の学びへつなげていかななくてはならない。その作り上げた参考書をいつでも使える状態にするためには、端末の日常的な持ち帰りの実施が不可欠である。現在、タブレット端末の持ち帰りを始めたところであるが、今後、さまざまな問題が発生することも予想される。何が問題であるかをつかみ、臨機応変に対応することが大切である。日常的に実施するために課題を克服し、生徒の学習意欲や学力の向上につなげていきたいと考えている。

#### ② デジタルシチズンシップの育成

生徒がタブレット端末を一人一台扱っている現在の状況において、これまでの情報モラル教育では、日常の諸問題に対応できなくなっている。それは、タブレット端末が何人かでシェアをして使うものから、個人が占有して使うものに変化したためである。そこには、端末を扱う生徒自身に責任が発生し、端末を扱う姿勢や態度も変わっていかねばならない。そのため生徒自身が問題の善悪を判断しながら賢くICTを活用できる力を身に付ける「デジタルシチズンシップ教育」への転換が必要である。生徒のICT活用力の向上だけを目指すのではなく、生徒自身のICTを活用する態度も育成していきたい。